

杉並ユネスコ協会会報

155号

2025年
8月12日

Suginami UNESCO Association News Letter

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

ユネスコ憲章前文より

- 心の中に平和の守りを固めよう
- すべての人間の尊厳を重んじよう
- 教育・科学・文化の発展に努めよう
- 民族間の疑惑と不信をのぞこう
- 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう



杉並ユネスコ協会

目次

特集 人類大移動時代をどう捉えるか？	2
ユネスコのつどい	4
2025 年度総会	5

広島スタディツアー／国際中学生交歓会	6
中学生クラブ	7
ユネスコ入門／サマーコンサート／活動予定	8

政策 労働力 分断 差別・偏見 文化 移民 排外主義 人権 治安 共創社会



人類大移動時代を どう捉えるか？

反グローバリズムが加速する中で、国内では7月の参院選の争点の一つに「外国人政策」が急浮上しました。この問題は、単に「外国人を受け入れるか／拒否するか」ではなく、私たちの社会がどんな価値観で共生していくのかを議論するスタートに立ったのだと思います。感情論ではなく、事実に基づいた理解と対話が求められています。

移民は世界の潮流

近年のウクライナや中東情勢の緊迫化に加えて、より豊かな環境を求めて移住する人たちが急増しています。2000年以降に大規模化した移民の数は、2024年には3億人を超え、世界人口約82億人のうち、27人に一人が移民という試算になります。

「移民」と聞くと、紛争や災害から逃れる人々を思い浮かべる方も多いかもしれませんが、それは一部の印象に過ぎません。国連の国際移住機関(IOM)では、移民とは「本来の住居地を離れて移動する人の総称」と定めています。つまり、仕事や留学、家族の転居に伴う移動も含まれます。実際、避難生活を送る人々は全体の半数にも満たず、IOMは、「この誤解を生じさせる誤情報や政治家による情報ではなく、事実を正確に捉える必要性」を指摘し、警鐘を鳴らしています⁽¹⁾。

移民大国ニッポン

世界的に人の移動が加速する中、日本も例外ではありません。法務省は、3ヶ月以上定住する外国人を「在留外国人」とし、住民登録や納税、社会保険や国民健康保険への加入を義務付けています。つまり、彼らは制度上、私たちと同じ「日本で暮らす生活者」です。

この在留外国人が、国の想定を大きく上回る2倍以上のペースで増え続け、2023年末の341万人から1年間で36万人増加、3年連続で過去最多を更新しています。

日本は、人口あたりの外国人比率こそ高くないものの、実数で見るとOECD加盟38か国の中で第8位。特にアジア諸国から先進国への移住においては世界最大の受け入れ国とされています。すでに移民大国と呼べる状況が進行しているのです。

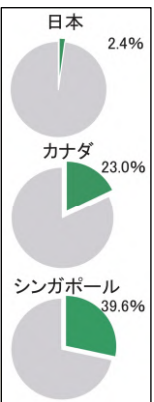
さらに注目すべきは、人口構造への影響です。日本の総人口は2008年をピークに減少を続け、2024年には1億2380万人と、前年より55万人減少しました。しかしこの数字は、急増する外国人を含んでいいます。実際の減少数は約90万人ですが、そこに外国人の増加が加わることで、表面的な減少数は緩和されているのです。



【グラフ1】世界の移民推移
IOM「国際移民ストック 2020」、「WORLD MIGRATION REPORT 2024」より作成

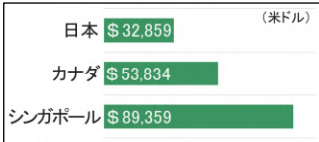
外国人受け入れの是非

移民は、文化や風習の違いによる誤解や偏見、治安や経済、雇用への影響など様々な懸念とともに語られ、否定的に見られることも少なくありません。一方で、世界銀行は「適切に管理されることで繁栄の原動力となる」と分析しています。その裏付けとなる国際送金額は2000年の1,280億ドルから2022年には8,310億ドルへと6.5倍に増加し、人材を送り出す新興・途上国にとっては、出稼ぎ労働者からの送金が、本国経済を支える重要な柱となっていることが分かります。また、受け入れ国では、経済の活性化や人手不足などの社会課題を解決する手段として需要が高まり、特に少子高齢化が進む先進諸国間では高度なスキルを持つ外国人の争奪戦が激化しています。例えば、「経済成長は外国人労働者の存在によるもの」という考えが国民に広く浸透しているシンガポールは、総人口の約40%を外国人が占め、元々移民が多いカナダでも、早くから外国人材の受け入れに力を注いできました。もちろん、移民政策が全てとは言えませんが、これらの国の一人当たりのGDPを比較すると、その差は歴然です(グラフ3、4)。



【グラフ3】在留外国人が占める割合

総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」、カナダ統計局「移民人口の最新動向をまとめた2021年国勢調査」、シンガポール統計局「人口と人口構造」より作成



【グラフ4】一人当たりGDP

IMD「World Economic Outlook Database, October 2024」より作成

国際批判と課題点

かつて日本は、人口過剰を背景に多くの人々を海外に送り出した「移民の送り出し国」でした。明治維新以降から1970年代にかけて、百数十万人が国策として海外へ移住していきます。しかし1980年代に入ると転期が訪れます。国内でいわゆる3K(きつい、汚い、危険)とされる職種で人材不足が深刻化し、外国人労働者の受け入れが本格的に始まりました。以来、少子高齢化を背景に、外国人労働力に依存する傾向は年々強まっています。

ところが、日本の外国人労働環境は国際的に大きな懸念を呼んでいます。技能実習制度のもとで働く外国人が暴力や差別、過重労働などにさらされる事例が後を絶たず、「現代の奴隷労働」と厳しく批判されているのです。実際、厚生労働省の立ち入り調査では、技能実習生の受

け入れ先の73.3%に安全基準や賃金搾取など労働基準法違反が確認されました⁽²⁾。さらに、2023年度には、外国人労働者の死者数が5,672人、失踪者が9,753人といずれも過去最多を記録しています。

問題の技能実習制度は、ようやく2027年度から段階的に廃止され、新たに育成就労制度への移行が決まりましたが、本質的な課題の解決には至っていません。移民政策は本来、誰をどのような条件で受け入れるかを定める「入管政策」と、受け入れた人々が社会に適応し共に暮らせるように支援する「統合政策」の両輪で成り立っています。ところが日本では、前者の受け入れ拡大ばかりが進む一方で、後者の生活支援や人権保障の仕組みが整備されておらず、これが多くの問題の温床となっているのです。

外国人労働者の問題を通して浮かび上がるのは、人権意識の脆弱さであり、ジェニーズ性加害問題や、女性の権利、児童虐待、LGBTQ+への差別、障害者の権利侵害などにも共通する、日本社会が抱える深層の課題ではないでしょうか。

現在、G7の中で差別禁止法が存在しないのは日本だけです。また、世界120か国が設置している政府から独立した国家人権機関も日本には存在していません。こうした状況を受け、国連は「日本の社会規範は時代遅れであり、社会が丸となって変革を進めるべきだ」と苦言を呈しています⁽³⁾。

さらに忘れてならないのは、日本の外国人問題は、欧米のような国境危機や大量の難民流入を背景としたものとは異なるという点です。労働力として迎え入れてきた日本独特の構造的問題が、いま改めて問われています。

国民の意識調査

法務省の調査⁽⁴⁾では、外国人と日常的に関わりのない日本人は4割を超え、多くは「きっかけがない」と答えています。また、地域の外国人増加については賛否が分かれる中で、半数が「判断できない」と回答しており、接点の少なさが不安の背景にあると見られます。

一方で、異文化理解や労働力確保といった点には7割が肯定的で、外国人によって日本人の仕事が奪われる懸念は2〜3割にとどまっています。さらに、差別や偏見の存在を7割もの人が意識しており、交流の機会や共生教育を充実させる必要性を感じている人も多く存在しています。

アンケート結果から可視化されたことは、外国人との共生は、未経験な日本人が多いため不安を抱く人が多数存在することと、漠然と想像されているような否定的な見方は少なく、双方が接する機会の必要性を多数の人が感じている状況です。日常における相互理解の機会の場づくりがカギとなるでしょう。

日本人論という幻想

在留外国人にまつわる議論のひとつに排外主義がありますが、この根底には、「日本は単一民族国家」という思い込みがあるのではないのでしょうか。

しかし、かつての日本はアイヌや琉球、朝鮮、台湾漢民族など、複数の民族で構成された多民族国家でした。敗戦で領土の縮小と共に「単一民族」説が流布されましたが、それは事実とは異なる幻想に過ぎません。

以前、麻生元首相が「一つの民族、一つの王朝」と発言して謝罪に追い込まれたり、中山元国土交通大臣が「単一民族」と発言して辞任に至ったように、誤った歴史認識は社会に大きな影響を与えます。

日本は古くから多くの異文化を受け入れ、独自の文化として発展させてきました。江戸時代には日本に渡ってきた中国や朝鮮の人々によって医術や陶芸が伝えられ、明治の文明開化では着物を脱いで髪を切り、椅子に座る西洋文化を積極的に取り入れました。他者との接点を通じて独自の文化を築いてきた日本の歴史は、多様性を受け入れる力を日本人が本来持っていることを物語っています。

日本を担う同志

2019年の流行語大賞に輝いた「ONE TEAM」。ラグビーワールドカップで日本代表が掲げたスローガンでした。代表メンバーの半数以上が海外にルーツを持っていたことに、驚きや違和感を覚えた人も少なくなかったようです。当時、キャプテンのリーチ・マイケル選手は「なぜ日本代表は外国人が多いのか？」と問われ、次のように答えています。

「これが今の日本だから。ラグビー日本代表の姿は日本の現実だし、未来の姿を先取りしている。ダイバーシティの大切さを社会にアピールできる存在なのです」⁽⁵⁾

異なる背景を持つ人々が一つのチームとして力を合わせる姿は、まさにこれからの共生社会のモデルのようです。プロ野球では「外国人選手=助っ人」という見方が根強く残っていますが、こうした発想も無意識の排外主義に通じる部分があるかもしれません。在留外国人は、外から来た人ではなく、共に未来を築く仲間であるという意識の転換こそが共生社会への第一歩ではないのでしょうか。

今回の参院選をきっかけに、「共に生きるとはどういうことか」という根本的な問いに、社会全体で向き合う機会となることが期待されます。(副会長 西野裕代)

(1) IOM World Migration Report 2024

(2) 厚生労働省 2024「技能実習生の実習実施者に対する監督指導、送検等の状況」

(3) NHK 2024「国連人権理事会『日本の社会規範は時代遅れ 最新に』」

(4) 法務省 2023「外国人との共生に関する意識調査(日本人対象)報告書」

(5) BBC ニュースジャパン 2020「ジャパン 2020 ラグビー日本代表が示した多様性と日本の和」

平和を考えるバスツアー

ユネスコのつどい 2025

6月18日(水) 原爆の図 丸木美術館、吉田家住宅、道の駅おがわまち 訪問



お天気に恵まれたものの猛暑と予想の朝、参加者の集合が早く、22名でセシオン杉並を8時半に出発。

バスの中では、今日の目的地「原爆の図 丸木美術館」を造られた丸木位里・丸木俊ご夫妻の紹介のビデオを見ました。1時間半ぐらいで、埼玉県東松山市の丸木美術館に到着。雨のない6月、美術館の周囲は緑の木々がいっぱい。

まず館長さんが、丸木美術館（1967年開館）が造られた歴史と丸木ご夫妻の熱意を話してくださいました。

それから、小寺隆幸・杉コ協理事による、15部からなる原爆の絵の説明に入りました。絵に描かれている内容、人々、場所、絵の中の時間の流れなどを詳しく説明されました。

第1部〈幽霊〉、第2部〈火〉（修復されて戻ってきたばかりでした）、第3部〈水〉。

はじめは3部までの制作のつもりでしたが、ある展覧会で、こんなことはありえないという人の言葉を聞いて、現実の被爆者はもっともっとひどいものだといって、丸木先生にもっと書いてほしいということで、制作がつづけられたそうです。



右・丸木位里（まるき いり、1901～95年）と、左・丸木俊（まるき とし、1912～2000年）。ともに画家として活動し、1941年に結婚。1945年の被爆地広島での体験をもとに、共同で《原爆の図》制作に取り組む。1982年、32年の歳月をかけて全15部の連作を完成。

描かれている絵を見ると、原爆の絵からは、こんなことがあっていいのだろうかと思に重く迫ってきます。原爆投下から80年たったというのに、いまだに世界は原爆の脅威から離れられない現実。丸木ご夫妻の平和を願う意志、絵を描かれた熱量を思うと、しっかり覚えて、伝えていかなければならないと改めて思いました。

ツアーではゆっくり、じっくりと見ることができましたが、全部を見て理解するには、もっともっと時間が必要だと思いました。

また、併設の「自由を扶（たす）くひと・望月桂」展（4月5日～7月6日開催）も見学しました。最近発見されたあたたかな自由主義を掲げる作家・望月桂（1886～1975年）の絵や掛軸、漫画風な雑誌の表紙など、戦中にこのような作家がいたことに驚きました。取り組みを続けることの大事さを思いました。

丸木美術館は改修のため2025年の秋から休館、2027年春に再オープン予定です。2年後、新しくなった丸木美術館にまた行ってみたいと思います。

丸木美術館を出発して20分ほどでバスは、実年代のわかる埼玉県内最古の古民家、吉田家住宅へ。

吉田家住宅は、享保6（1721）年に建築された国の重要文化財です。ここで昼食。山菜おこわとけんちん汁、囲炉裏で焼いた田舎風のお団子をいただきました。

そこから20分ほどで、新しく改修された「道の駅おがわまち」に到着。そこでお買い物やアイスを食べたり、また新鮮な野菜もたくさんありました。とくに美しい小川町特産の「和紙」（2014年に「細川紙」がユネスコ無形文化遺産に登録）は、目の保養になりました。

ツアーの参加者は、丸木美術館にそれぞれ心にかけて参加してくださったとのことでした。そして、よい企画のバスツアーでとても楽しめたと言っていました。暑いなか、皆さんお疲れさまでした。（理事 小泉俊子）

2025年度 杉並ユネスコ協会 総会

5月18日(日) セシオン杉並 講座室

杉並ユネスコ協会の2025年度総会が2025年5月18日(日)13時30分からセシオン杉並で開催されました。杉並区教育委員会から渋谷正宏・教育長、牛山進一郎・生涯学習推進課長のご挨拶をいただいた後、佐藤直子会長が議長を務め総会議事に入りました。

2024年度事業報告では、まず一般事業関連でユネスコ運動の日 SDGs 映画上映会（70名参加）、ユネスコのつどい講演会（同94名）、ウクライナ料理教室（同28名）、科学教室（2回、延83名）の4事業の報告、青少年事業関連で中学生クラブ（年間11回）、国際中学生交歓会（20名）、ユネスコ教室（6日間、キャンプ舎）の3事業の報告がありました。そのほか、杉並区および他団体との連携活動の報告、協会事業として広報、コー・アクション活動、青少年事業活動、会議・研究会、東京都ユネスコ連絡協議会や日本ユネスコ協会連盟との連携などの報告がありました。また青年部での青年たちの活動が活発に行われていることの報告がありました。

収支決算および監査報告では、例年規模の収支であったことが報告されましたが、会員数の減少で会費収入が



減っている一方、物価の高騰や教室に使用するバス代の値上がりなどがあり、やり繰りに苦労している様子も報告されました。

2025年度の活動計画案および収支予算案については、いずれも前年規模とほぼ同様となります。

議事後、いずれも承認されました。

また、今回は役員の改選がありました。役員選考委員会で検討され提案されたとおり承認されました。このたび退任された役員の皆様、これまでありがとうございました。

また、会則の改定も議案となり、会則改定委員会で検討・整備された新しい会則が承認されました。これにより1951年以来一部変更留まった従来の会則（A4サイズ1枚程度）からおおよそ4倍の長さに全面改定され、これまで不足していた部分が大きく補強されました。

総会の後、研修会では青年部が行った「韓国スタディツアー」の報告がありました。韓国のユネスコ協会青年たちとの交流の様子など写真を多数使った報告会でした。（副会長 井原太一）

バスツアー参加者の感想（抜粋）

- 大事な企画展と改修前の充実した展示内容を貴重な解説で見学させていただき、ありがとうございました。何度見ても、一点ごとに発見がある丸木美術館の作品群だと思いました。望月桂企画展の内容も素晴らしく、有意義な一日でした。
- 丸木美術館へ行きたいと思いながら実現できず、今日やっと来ることができ、嬉しく思っています。原画を目に新鮮で、知らなかったことを多く発見、学習することができました。2時間半ではすべて隅まで見尽くせなかったのが、可能ならば今度は家族と一緒に、もう一度時間を気にすることなく鑑賞したいと思います。
- 往路のバスの中で観たビデオで涙が出てしまいました。丸木美術館の作品について、一つ一つ丁寧に解説していただき有意義な旅でした。道の駅の抹茶パンとソフトクリームもおいしかったし、古民家に興味があるので、いろり、二階までよく見られて、とても楽しかったです。ありがとうございました。
- 丸木美術館、ずっと行ってみたいと思っていました。以前テレビで、美術館の老朽化で存続が難しいと。残念に思っていたのですが、何とか2年間ほどかけてきれいになるようで…。でも、改修前の美術館へ小寺先生の解説付きで何うことができて本当に良かったです。吉田家住宅で昼食、お団子もいただけて、さらに道の駅で和紙、小川町の特産物もお買い物でき、本当に盛りだくさんで、大満足です。丸木ご夫妻の作品、素晴らしかったです。これからもたくさんの方に観ていただき「平和の伝承」を！



第24回 広島 スタディツアー

3月26日(水)～29日(土) 参加者8名 理事2名

広島スタディツアーは、毎年3月に開催される高校生から社会人を対象とした平和学習のプログラムです。被爆地・広島を訪れ、原爆についての理解を深めることを目的に、被爆体験講話や資料館の見学、参加者同士の対話などを通して学びを深めます。今年で24回目を迎え、毎年継続的に実施されてきたこのツアーは、世代を超えて平和への思いをつなぐ貴重な機会となっています。

私もそのツアーに高校時代から参加しており、節目ごとに広島を訪れ、学びを重ねてきました。そして今回、私は通算6回目となる広島スタディツアーに参加しました。就職などのためしばらく参加の機会がありませんでしたが、以前と変わらず、ユネスコファミリーのみなさんに温かく迎えていただき、心より感謝しています。言葉で表すのは難しいのですが、この心地よく、思いを共有できるコミュニティが、今後も変わることなく続いていくことを願っています。

主な訪問先	
1日目	広島平和記念資料館、被爆体験講話
2日目	本川小学校、国連訓練調査研究所（ユニタール）広島事務所、旧広島陸軍被服支廠
3日目	江田島・海上自衛隊第1術科学校（旧海軍兵学校）、宮島・厳島神社
4日目	自由行動、帰京

初めてこのスタディツアーに参加したのは高校1年生のときでした。その後、高校生、大学生、社会人1年目、そして社会人8年目と、人生の節目ごとに参加を重ねてきました。参加するたびに、他の参加者の思いや視点に触れ、以前は気づかなかった展示に目を留めることで、より深く物事を考えるようになりました。そうした経験があるからこそ、私はまたこのツアーに参加したいと思うのだと思います。

今回の研修では、「平和記念資料館の改修前後で、どのような印象の変化があったか」という話題が取り上げられました。改修前は、リトルボーイ（原子爆弾）の模型や原爆投下直後のミニチュア地図、被爆者の蟬人形など、より生々しく現実を想起させる展示が多く見受けられました。一方、現在の展示は、入口すぐに原爆投下前後の街並みを写した写真が並び、その後、デジタル映像により町の壊滅が描かれます。14万人もの犠牲という数字の大きさに圧倒されるものの、「多くの命が失われた」という抽象的・平面的な印象にとどまりやすい側面もあると感じました。

しかし、その後に続く展示では、個々の家族の証言や遺品、手記が丁寧に紹介されており、「そこには確かに人が生きていた」という展示者の強い意図が伝わってきました。また、アメリカによる原爆開発から旧ソ連との競争、投下に至る背景、さらには戦後に至るまでの流れ

が、感情ではなく事実に基づいて提示されていた点にも大きな意義を感じました。インパクトのある展示から記録性・論理性を重視した構成への変化は、平和を次世代に伝えていくための大切な転換だと感じました。

とはいえ、その分「感覚的なリアルさ」が薄れた印象も否めません。そんなとき、私はピースボランティアの橘光生さんの「五感と想像力を働かせる」という言葉を思い出しました。時代も背景も異なる現在に生きる私たちが当時の出来事を理解するには、展示を受け身で眺めるのではなく、積極的に「想像力を働かせる」ことが不可欠です。

現在の静かな広島平和記念公園には、かつて6500人もの人々が暮らしていました。平和の願いとして、毎年1000万羽を超える折り鶴が世界中から届き、その重さは10トンにもなります。過去を「遠い昔の話」としてではなく、自分の目の前で起こったこととして捉えるために、私たち一人ひとりの想像力が必要です。

しかし、被爆体験を直接語ることのできる方が年々少なくなっています。「日常を突然奪われ、苦しんだ人々」の姿が、時間の経過とともに「そんなこともあった」と記憶がすり替えられていくことに、私は漠然とした不安を覚えます。

今回のツアーでは、若い世代がしっかりと考え、行動している姿を見ることができ、とても頼もしく感じまし

た。その一方で、世界はまるで過去の歴史を忘れてしまったかのように、協調とは逆の方向へと進んでいるようにも感じられます。だからこそ、こうした対話と学びの機会を絶やさずに継続し、次世代へ確かな形で伝えていくことが、今を生きる私たちの責務であると強く感じました。

最後に、私の心に深く刻まれた手記をご紹介します。

被爆3日後、敏彦が帰って来ました。ひどい火傷で、痛ましい吾が子の姿に、ただ取りすがって泣くばかりでありました。「僕がこんな火傷をしているので、お母さんがかわいそうだ」と、かえって私をいたわってくれた、やさしい言葉を忘れることができません。「僕は死なないよ、絶対に死んでなるものか。3分の1の火傷なら死ぬが、僕は5分の1だから死なないよ」と絶叫しながら、8月21日、とうとう死んでしまいました。

繰り返しになりますが、核兵器の是非を議論する以前に、失われる必要のなかった14万人の命が奪われたという事実を、私たちは決して忘れてはなりません。例外なく苦しみを強いられ、一切の優しさを許されなかったという現実を、決して風化させてはならない——その思いを胸に、これからも平和を考え、語り続けていきたいと思います。（青年部 廣瀬数寿）

国際中学生交歓会

4月2日(水) セントメリーズ・インターナショナルスクール

世田谷区のセントメリーズ・インターナショナルスクールで国際中学生交歓会が行われました。これは杉並区の中学生在がセントメリーズ校を訪れ、同校の中学生とペアになり、一緒に授業を受けるというものです。

後ろから授業の様子を見ると、日本とは全く違った海外の学校の雰囲気に多く驚かされました。例えば英語の授業、日本の学校で言うところの国語の授業では、教師と学生の間に壁がなく、積極的な授業参加がなされていました。

他にも、数学の授業では、問題を解いて先生がそれを解説するような進め方ではなく、先生はほとんど見ていただけであり、生徒間での話し合いが盛んに行われていました。また、生徒はほとんど椅子に座らず、ホワイト



ボードを使って、周りと意見交換を活発に行っていました。これらの授業を受けて、訪問した中学生も独特の雰囲気を感じながら、楽しんで授業に臨んでいました。

今回、交歓会に参加してみて、日本の授業の進め方、海外の授業の進め方それぞれの違いを知ることができました。ただし、これはセントメリーズの生徒とも話したのですが、どちらが優れているかということではなく、どちらの方法でも授業を理解することはでき、どちらの学習法が向いているかは本人次第だと感じました。個人それぞれに合った、勉強をできる環境づくりが大切なのだと思います。（青年部 湯田晴斗）

ユネスコ中学生クラブ・・・英会話と国際理解（セッション杉並ほか）



April 4月12日

開級式・ユネスコ紹介
英会話



June 6月14日

英会話
スポーツ大会



May 5月10日

英会話
アメリカの話



July 7月12日

英会話
ボリビアの話



国連機関ユネスコの活動をやさしくひもとくコーナーです。
第1回目は、活動の土台となる考えをお届けします。

戦争は心の中で始まり、 平和も心の中から築かれる。

戦争は、お互いの文化や暮らしを知らないことから始まります。過去の戦争も、無知や偏見が「差別こそ正しい」と思わせることで起こりました。政治や経済の約束では、本当の平和は続きません。だからこそユネスコは、全ての人が教育を受け、文化を学び合い、自由に考え語り合うことを大切にしています。「教育・科学・文化」を通じて人々をつなぎ、世界に平和と幸せを広げる——それがユネスコの目指す社会です。
知らないことが争いを生むのならば、知り合うことで平和をつくる。ユネスコはそう考えています。（「ユネスコ憲章前文」意識）

募集



ユネスコ ギャラリーツアー 「ミステリー・オブ・ツタンカーメン」探訪

9月23日 10:40～12:00 事前レクチャー
(火・祝) (TKP ガーデンシティ横浜)
13:30～自由解散 ツタンカーメン・ミュージアム見学
(横浜みなとみらい PLOT48)

約100年前に発見されたツタンカーメン王墓。黄金のマスク、厨子、棺、神々の像など130点あまりの副葬品が精緻に再現され、王墓（玄室）も原寸大で再現されています。専門家による解説付きの体験ツアーです。

- 講師 村治笙子氏（古代エジプト壁画研究家）
- 区内在住・在勤・在学の方ほか
- 定員30名（申込順）
- 参加費4,700円（高校生以下割引あり）

※要申込。詳細は「広報すぎなみ」
8月15日号をご覧ください。

副葬品のレプリカ製作を担当したムスタファ教授（左）と講師の村治笙子氏（右）



募集

ユネスコ料理教室「韓国料理」

11月1日(土) 10:30～14:00
高井戸地域区民センター 料理室



- 講師 李 南美氏（杉並区役所 韓国語サポートデスク相談員）
- 区内在住・在勤・在学の方（中学生以上）
- 定員20名（申込順）
- 参加費1,200円

menu

- サムギョプサル(豚バラ肉の焼肉)
- キンパ(韓国風のり巻き)
- オイキムチ(きゅうりのキムチ)

※要申込。詳細は「広報すぎなみ」10月1日号（予定）をご覧ください。

編集後記

「逆転しない正義」とは、目の前の困っている人に手を差し伸べること。放送中の朝ドラ「あんぱん」のモデル、やなせたかしさんが戦争体験を通じて導き出したメッセージです。代表作「アンパンマン」には2,300体以上の多様なキャラクターが登場し、その数はギネス世界記録にも認定されています。違いを認め合い、支え合って生きていく共生の社会が描かれていたのですね。（副会長 西野裕代）

杉並ユネスコ協会会報 155号 2025年8月12日発行

発行者 杉並ユネスコ協会 会長 佐藤直子

事務局 〒167-0031 東京都杉並区本天沼2-32-10 朝倉方
TEL&FAX 03-3399-2383 E-mail suginami@unesco.or.jp

編集 杉並ユネスコ協会広報担当

口座 ゆうちょ銀行／記号10040 番号18974381（ゆうちょ銀行間での振込）

店名〇〇八(ゼロゼロハチ) 店番008 番号1897438（他行からの振込）

みずほ銀行／荻窪支店 普通口座 番号4047995

ホームページ <http://suginami-unesco.org/>

報告

第45回サマーコンサート

主催:杉並区コーラス連盟

7月5日(土)
セシオン杉並ホール

杉並区コーラス連盟の第45回サマーコンサートが開催され、杉並ユネスコ合唱団も参加しました。曲目はエルガーのAve verum Corpus Op. 2, No. 1、ストラビンスキーのAve Maria、そしてモーツァルトのAve verum Corpus、すべてラテン語の曲です。歌ったことのある曲ばかりなのに難しかったですが、橋本芳子理事が亡くなって最初のコンサートでよい報告ができる演奏になりました。今回も指揮者の小澤純先生、伴奏の増澤明希子さんにはお世話になりました。感謝をしつつ、また練習に励むつもりです。



活動予定

8月 August

2日(土)～ ユネスコ教室
6日(水) (宿泊学習やJICA訪問など)

9月 September

5日(金) 理事会
13日(土) 中学生クラブ
(英会話と国際理解)
23日(火・祝) ギャラリーツアー
27日(土) 関東ブロック・ユネスコ
活動研究会 in 埼玉・深谷

10月 October

3日(金) 理事会
12日(日) 中学生クラブ
(東京ジャーミイ訪問)
18日(土) 日本ユネスコ運動全国
大会 in 金沢

11月 November

1日(土) 料理教室
7日(金) 理事会
8日(土) 中学生クラブ
(英会話と国際理解)

12月 December

5日(金) 理事会
10日(水) 平和のためのポスター
コンクール表彰式
20日(土) 中学生クラブ
(イヤーエンドパーティー)

杉並ユネスコ合唱団練習 ※は予定

8月28日(木) 9月11日(木)
10月9日(木) 10月23日(木)
11月13日(木)※ 11月27日(木)※
12月11日(木)※